入選

小日向　葵衣（おびなた　あおい）　みなみ野中　３年生

作品名：世界から猫が消えたなら
図　書：世界から猫が消えたなら

「世界から猫が消えたなら」
いきなり余命あとわずかを告げられた主人公。
人は死を目の前にした時、意外なほど落ち着いていられるものだと作者は言う。果たしてそれは本当なのだろうか。その答えは、実際に死を目前とした人にしか分からないと思う。私の祖父は以前、病気にかかり手術をした。優しくしてくれて、いつも笑顔だった祖父がいなくなるかもしれない。怖くて震えた。全く想像できなくて考えるのをやめた。一人の人がいなくなる、その重さが身に染みた。人は誰もが死と隣り合わせで生きている。そして人はすべて、その人生には必ず終わりがあり、避けて通ることのできないものだ。生きる意味や生まれた意味。これらの答えは生きていれば必ず見つかるものだろうか。私は一体何に向かって生きているのだろうか。そんなことを考えると、宇宙のように遠く、海のように深く、未知の世界に吸い込まれるような気分になった。「世界から僕が消えたなら。」この世界は何も変わらず、同じような明日を迎えるのだろうか。
「あなたは明日死ぬんです。」死を突然告げられた主人公は、残された一日が惜しくなる。一日生きる、そのために彼は「失う」ことを決意した。地球にある何かの存在を消す。それは、今では誰もが頼っている電話、主人公にとって生き甲斐であった映画、生活の基準となる時計。地球にある「もの」の中から無作為に選ばれたものたちだ。そもそも世の中は「もの」で溢れ過ぎていると思う。探せばいくらでも出てくるであろう「必要のないもの」はっきり言ってしまえば生きるために本当に必要なものは数少なく、他は消しても良い「必要のないもの」だと思っていた私の考えは百八十度、全く反対になった。世の中に意味なく生まれたものはないのだ。
昔、誰かに聞いたことがある。
「遠く離れた愛しい人の声が聞きたい。」
この思いが電話というものを生み出したのではないか。生まれるものには思いが込められている。思いが新たなものを作り出している。そして、この先も誰かが新たなものを作り出す。私が生きている間にどれだけのものが生まれるのだろう。空を飛ぶ自動車、月へ行くエレベーター、ドラえもんのような世界へいつか変わるのか。
新たに生まれていくものから、人は何を得ることができ、そして何を失うのか。
「何かを得るためには、何かを失わなくてはならないね。」

人は欲張りである。何かを失うことは怖いくせに、何もかもを得ようとする人ばかりである。少なくとも私はその中の一人であった。これが、奪う行為に他ならないということを実感していなかった。人の幸せが誰かの不幸の上に成り立っているように、何かを得ることは何かを失うことの上に成り立っている。人はこのことを分かりきっていない。この話では時計も消してしまっている。私がこの本を読んで一番長いこと想像した、『世界から時計が消えたなら』時計のない空間にいるとき時間の感覚はなくなってしまうだろう。時間というものは不思議である。そもそも地球にはなぜ時間というものが存在しているのか。人間は勝手に二十四時間を一日と定め、朝と昼と夜を作り、月曜日から日曜日という七日の一週間を作った。これは人間が定めた定義であり、ルールである。人は生活している中で時間というものに強く縛り付けられている気がする。その時間がなくなったとすれば人は解放され、自由を得ることができると考えた。陸上選手には申し訳ないが、走る速さも風の速さも車の速さも電車の速さも、分からなくたって生きていける。人は限りある時間の中で生きている。主人公のように余命というものを宣言されても、時間という定義がなければ、せまり焦ることもないし、ゆとりができるのではないか。時間という定められたものを一度忘れることは生きている中で大切なことだと強く感じた。

　ここまで様々な考えを自分なりにしたつもりだ。この話は今までにないくらい考えさせられることをたくさん与えられた。果して、一生が終わる時、人は何を感じ、何を考え、何をするのだろうか。多分生きる意味など決ってない。自分で作り出していくのだろう。生きる意味を知って生きる必要などない。今まで生きてきた時間を、一度振り返れば分かる気がする。

「自分の存在。」

そこに確かにいた、自分の存在を知ってくれている人に問いたい。

「世界から僕が消えたなら。」

世界は変わるだろうか。